
朱光のかけら

micky

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朱光のかげら

【Nコード】

N2060B

【作者名】

m i c k y

【あらすじ】

新一がアメリカに行ってしまった。自分の事故から半年……。もしかしたら私達は結ばれないのかもしれない。夜明けの続編ですが、また違う作品として読んで頂けたら幸いです。

1話（前書き）

この話は夜明けの続編ですが、やや快蘭気味のストーリーとなっています。決してそうではないですが・・・。

1話

新一・・・お願い・・・一人にしないで。
もう、あの時のようにコナン君はいない。

みんなが思うほど私は強くないんだよ・・・新一。

あの事故から半年。

私は意識を取り戻した。

だけど・・・意識が戻らないほうが良かったのかも・・・。
私は髪をかき上げて、クスツと笑った。

あの日・・・。

新一が突然帰ってきた日

「待たせたな・・・蘭。これからはずっとそばにいるからよ」
そう言って抱きしめてくれた。

これからはずっと一緒に過ごしていけるんだって・・・思ったのに
な・・・。

また、新一は行ってしまったんだね。

「アメリカか・・・遠いなあ」

新一のいる場所も連絡先も分かっている・・・。

園子から新一が私の事で悩んでいた事も聞いた。

毎日、お花もくれたんだってね。

いつも眠っている私に話しかけてくれていたって……。

新一、ありがとう。

…そして心配させてごめんさい。

あのね、新一。

みんなが私を心配してくれているよ。

お父さん達が一緒に暮らしているんだよ、知ってた？。

あと、園子も毎日のようにお見舞いに来てくれているの。

園子だけじゃない。沢山の人たちが毎日のように来てくれる。

私は頑張って笑顔を絶やさずにいるけど…。

だけど新一に…やっぱりいて欲しかったよ。

私…また、置いてけぼりなんだね…。

私は繰り返すの？

新一を一人で待つ日々を…。

ねえ・・・新一。

この夜空の月がとても綺麗すぎて…切なくて苦しいよ。

私は月に導かれるように屋上にあるフェンスへと手をついた。

「危ないですよ・・・お嬢さん」

孤独に押しつぶされそうな夜にその声が囁く。

「今宵の月に、あなたの涙は似合わない」

泣いたらいけない。

みんなが心配してしまう。

彼の白いマントが私を包み込み、あまりの優しい抱擁とその声に私の涙は…止まらなかった。

今、オレの胸の中で泣いているこの女性。

彼女は工藤新一の恋人。

ここは東京から少し離れた海が見える病院の屋上庭園。

オレはさっきイタリアから日本に戻ってきたばかりだった。

今夜は満月。

一仕事を終え、夜景をみながら家路へと急ぐ。
その時、オレの目に飛び込んできたのは…。

遠くからでも分かる儂い姿。

透き通るように白い肌……。
漆黒の長い髪……。

悲しげな瞳・・・。

最初、月夜に照らされて彼女の姿がハッキリと見えた時

理由などない。

オレが数々知る名画よりも、どんな宝石よりも綺麗だった。

そう・・・ただ、惹かれただけだ・・・。

「散歩には少し遅い時間ですよジュリエット。君の騎士は？」

首を振って何か言おうとするが、涙が溢れて言葉に出来ないようだ。

よっぽど、何か辛い事があったのだろう・・・。

「ちょっと失礼！」

オレは彼女を抱え、空に舞い上がった。

「えっ！」

一瞬の事に驚く彼女を横目に、オレはさらに高く空を目指した。

東京の夜景が宝石箱のように輝いている。

「きれい・・・」

「悲しまないで。あなたには笑顔が似合いますよ」

カナシマナイデ・・・。

あの時…病室で聞こえた新一の声。

「新一が・・・アメリカに・・・」

オレは初めて知った。

工藤新一がアメリカに行った事を。

何故、彼女を残して行ったんだ？

それとも、直ぐに帰って来るのだろうか？

いや…そんな事は別にどうだっていいんだ…。

今、彼女が泣いている事は事実だ。

「・・・一曲、踊って頂けますか？」

そう言う病院から少し離れた噴水の前に降り立った。
そしてオレは跪いて彼女にスツと手を差し伸べた。

「でも・・・あの・・・私」
困ったように辺りを見回す彼女に

「大丈夫ですよ。私を信じて・・・さあ、お手をどうぞ」
白く綺麗な手が、ためらいがちにオレの手の平に合わさる。

月夜に照らされてゆっくりと踊る2人。

「上手ですよ。その調子で」
彼女が少し微笑む。

彼女には悲しい顔は似合わない。

「昔、新一とダンスの練習したけど上手く出来なかったのに・・・」

その笑顔・・・。

「それは貴女が躊躇していたからでしょうね・・・その証拠に今は・・・ほら」

もしも君が奴の恋人でなければ・・・

オレは・・・。

踊るのを止め、オレは彼女を見つめる。

「あの・・・ありがとうございます・・・もう、大丈夫です」
偽りの笑顔。

オレは手を離さない。

「あの・・・あの・・・えっと・・・」

離したくない・・・。

その時

「らん！」

女性の声が遠くから聞こえた。

「園子だ・・・私、病室を勝手に抜け出してきちゃったから・・・」
声の方へと振り返る。

病室？

俺はフツと笑みを浮かべ

「時間のようですね。今宵はとても楽しい夜でしたよ」
ヘリコプターが俺の上に来てきた。

「また、お会い致しましょうお嬢さん・・・今夜の月が再び満ちる
その前に・・・」

その瞬間、強い風と共に姿を消した。

「蘭！ダメじゃない。まだ体調が戻らないのに！何かあったらどう
するのよ！」

涙で怒りながら蘭を抱きしめた。

「ごめんね園子・・・ちょっと新一の事を考えてて」

その言葉に思わず力が緩む。

「わかるけど・・・。連絡しないでって言ったのは蘭だからね・・・

。今度勝手な事をしたら直ぐに電話するわよ。わかった？」

「うん・・・本当にゴメンね」

園子は気がついた。

（今日の昼間より少し元気になってる？）

・・・なるほどな・・・。

近くの高い木の陰から2人を見ている白い影があつた…。

1話（後書き）

期待はずれの人も多いと思います。

御免なさい・・・。

あと青子さんにも御免なさい・・・。

2話

オレは工藤新一の近況を調べた。

（本当にアメリカに行ってしまったんだな・・・）

寺井がコーヒーを持って快斗のもとへやって来た。

「ぼっちゃま。今度は何をお探ですか？」

パソコンで真剣に工藤新一について調べている快斗に首をかしげた。

アメリカに渡って直ぐに大きな事件を解決し、向こうでは新一の話で盛り上がってるらしい。

FBIの捜査にも協力をし、次々に難事件を解決しているという。

「現在はNYに在住つと...。」

何やってんだろ。オレ.....。

奴の事を調べたて仕方ないじゃないか。

でも、気になるんだ...。

そう言えば彼女、病院って言ってたな...。

何か病気なのか？

考えれば考えるほど頭の中に彼女との事が頭から離れない。

参ったな・・・。

背もたれに寄りかかり天上を見上げる。

「毛利 蘭…か」

大きなため息を吐き、後ろに反るように背伸びをした。

目線をゆっくりと後ろへやると・・・。

「うわぁ！ジイちゃん何でいんだよ！」

「先ほどからずっといましたが…」

そこにはコーヒーを持ったままの、寂しそうな寺井の姿があった。

ここにも心にモヤモヤがある人物が。

「やっぱり新一君に連絡するべきじゃないのかしら・・・」

園子は困ったように携帯を手に取りながら右往左往していた。

「でも、蘭は連絡するのはやめてって言ってるし…あー！どうした

「らしいのよ！」

こんな時、こんな時は… そうだ！和葉ちゃん！
でも、今は留学前の勉強で忙しいわよね…。

…………… ええい！かけちゃえ！

確か送別会のときに教えてくれた連絡先があつたはず。

「これよ！」

電話をかけるとすぐに元気な声が飛んできた。

「もしもし、どちらさーん？」

「あの… 東京の鈴木園子です」

しばらく沈黙が流れ

「ああ！蘭ちゃんのお友達の！」

絶対、忘れてたわね…。

「ちよつと、相談したいことがあつて」

「なに？蘭ちゃんに何かあつたん？」

和葉ちゃんは真剣な口調で聞き返してきた。

「蘭が新一君に連絡しないでほしいって言ってるのよ」

「なんでなん！？」

私は私が知ってる限りのことを彼女に話した。

「そつか…。あんまりわからへんのやね」

「・・・」

だつてだつて！蘭つてば一人で考えて一人で悲しんで。

私の存在ってなんなのって感じ。

「うちは連絡した方がええと思うけど…」

電話の向こうで少し考えて

「蘭ちゃんに直接聞いてみた方が早いかもしれん。うち、東京に行くわ」

と言うと直ぐに電話を切ってしまった。

和葉ちゃんが東京に来说う事は…。

勿論、あの色黒の彼氏も付いてくるわけよね。

私は再び携帯を押した。

「もしもし私よ。…ええ…一応2人分泊まれるようにしておいて頂戴」

明日には来るのかしら？

まさかね…。

翌日、東京駅には大阪弁で痴話喧嘩をしながら歩く2人の姿があった。

2 話（後書き）

読んで頂きありがとうございます！
快斗って難しいですね。書いてて思いました…。

3話

オレは翌日、病院へと足を運んだ。

まるで迷路のように大きい病院。

一人で探すにはさすがに大変だよな。

ちょうど近くを通りかかった看護師に尋ねた。

「すみません。毛利蘭さんの部屋はどこですか？」

その看護師が驚いたようにオレをみた。

「あらあ！久しぶりですね！最近、顔をみないと思ったら元気でしたか？」

「へっ？」

なるほど……。どうやら、工藤新一と間違えているらしいな……。

「ああ、お久しぶりです。以前よりお美しくなられて気がつきませんでしたよ」

オレは工藤に成りすまして話を続けた。

「実は・・・事件がなかなか片付かなくて蘭に会いに来れなかったんです。友達に部屋が移動したと聞いたのですが」

看護師は頬を赤らめて

「いえ、毛利さんはずっと701号室にいらっしゃいますよ」

701号室つと……。

「ありがとうございます。助かりました。これはほんのお礼です」
そう言って赤いバラを一輪差し出した。

「まあ！」

「では・・・急ぎますので」

オレは足早にその場を去った。

にしても・・・。

このままだと工藤新一と間違われるのも困るな。
何より・・・腹が立つぜ。

オレは年寄りに変装する事にした。

こんなに老人が多いんだ。紛れ込むには手っ取り早いしな。
オレは完璧な変装に鼻歌を歌いながらトイレから出てきた。

その時、

「イタゝイ」

女の子にぶつかってしまった。

「すまないねえ・・・大丈夫かい？」

女の子は涙目になっている。まずいな・・・。

オレは白いハンカチを取り出し

「タネも仕掛けもないこのハンカチじゃが」

両面をみせて、その女の子の手の平に乗せる。

「よくみててごらん。1・・・2・・・3！」

そのハンカチが白いウサギになった。

「このウサギは泣いてばかりいたから目が赤くなっただんじやよ」

女の子はウサギの目をみながら

「ねえ、おじいさん。歩美もウサギさんのように目が赤くなるの？」

心配そうな彼女に

「大丈夫じゃよ。笑ってごらん」

彼女はエヘへと笑ってみせた。

「いい笑顔じゃな。それなら大丈夫だ。さあ、ウサギを元の姿に返してあげよう」

そしてそのウサギを元のハンカチへと戻した。

「おじいさん。すごい!!」

女の子は嬉しそうに拍手をした。そして

「おじいさん! 歩美の一生のお願い! 蘭お姉さんに会ってほしいの
!」

「!」

「蘭お姉さん……。恋人が遠くに行っちゃて寂しそうな。目が
さっきのウサギさんのように赤くてね。歩美は泣いてるところは見
た事ないけど、ウサギさんと同じ目って事は泣いてるって事だよね
」

「お願い! おじいさんは魔法使いなんでしょう?」

あれ……。この場面どこかで……。

「……。魔法の事は誰にも言ってはいかんぞ。約束は守れるかな?」
「うん! 歩美誰にも言わないよ! おじいさん、こっち、こっち!」
オレは以外にも早く彼女に会える事となった。

3 話（後書き）

さて三話です。

先が読めてきましたでしょうか？

4話

1701号室 毛利 蘭

オレは部屋の前でドキドキしていた。

落ち着け・・・オレ・・・。

歩美ちゃんというこの少女が扉をノックした。

「蘭お姉さん！歩美だよ！」

すると中から

「歩美ちゃん？どうぞ中に入ってきて」

歩美ちゃんはドアをゆっくりと開けた。

窓辺の椅子に座って、揺れるカーテンの隙間から彼女がみえた。

泣いていた？

席を立ちこつちへ近づいてきた。

彼女は痛々しいほどの笑顔で迎えてくれた・・・。

我慢しやがって・・・。

彼女はオレをゆっくりと見つめた。

「歩美ちゃん？この人は・・・」

「あのね！あの・・・この人は・・・えつと・・・ウサギ屋さん
！」

「ウサギ屋さん？」

不思議そうにオレをみる。

慌てて

「いえいえ、ただ・・・ちょっとしたマジックをみせたんじゃない。この子にウサギを見せたらウサギ屋さんになってしまったようじゃ。フオフオフオ」

彼女はクスツと笑った。

「あー！今、蘭お姉さん笑ったあ！」

歩美ちゃんが喜んでいる。

「だって蘭お姉さん。ちつとも楽しそうに笑わないんだもん。歩美は前のように蘭お姉さんに笑ってほしいんだもん！」

その言葉に彼女は

「ありがとう歩美ちゃん。こんな小さな子にも私は心配されていたんだね・・・ごめんね」

そう言うとき歩美ちゃんの頭を軽く撫でた。

「エヘヘ」

オレは彼女の本当の笑顔がみたくなった。

「じゃあ、わしは用がすんだのかのう？」

歩美ちゃんが慌てて

「蘭お姉さん！このおじいさんは不思議なウサギ屋さんのの。きつと蘭お姉さんの願いも聞いてくれるから」

「ありがとう・・・歩美ちゃん。でも、私の願いは・・・」

窓の外へと視線を向け、遠くを眺めている。

君の視線の先には何がみえるの・・・。

「そうだ！歩美、園子姉さんにさつき会ったんだ」

思い出したように早口で

「あのね！蘭お姉さんに「あとで大阪の騒がしい2匹を連れて行くから出かけないでね」って。歩美、忘れないように急いで蘭お姉さ

んの部屋に向かっていたらおじいさんとぶつかっちゃたの」
「大阪の2匹？もしかして和葉ちゃん達かな？」

ゲツ・・・もしかして服部平次もくるのか？
だとしたら長居はできねえな。

「じゃあ・・・わしはこれで・・・」

部屋を出ようとしたオレを歩美ちゃんが服の裾を引っ張り

「蘭お姉さんのお願いは叶えてくれないの？」

と泣きそうにオレに言ってきた。

歩美ちゃんをなだめる様に彼女が

「ウサギ屋さんはみんなのお願いを聞かなくちゃいけないから忙しいんだよ・・・。私は大丈夫だから・・・ねっ・・・泣かないで」
優しく彼女が抱きしめる。

まるで自分に言い聞かせてるみたいに・・・。

泣きたいのは自分だろ？

そんな風にみんなに気を使ってるから、いつまでも泣けないんだろ
う？

急にオレは苛立ちを覚えて思わず

「泣きたいなら・・・恋人の所に早く行ってしまえばいいだろ！」

遅かった・・・。

オレは急いで部屋を出た。

いかなる時もポーカーフェイス。

相手に自分の感情を読まれてはならない。

今まで出来ていた事がなぜ出来ないんだ・・・。

ーオレのほうが泣きたいよー

病院の入り口で服部平次たちとすれ違った。

服部がこっちをみている。

オレは服部平次の視線を背に病院を飛び出した。

4話（後書き）

はい4話でした。

こんな感じになりましたけどいかがでしょうか？

まだまだ続きそうです・・・（汗）

これからも宜しくお願いします！

5 話

開けられたままの扉をボンヤリと見ながら、私は歩美ちゃんが泣き止むまで抱きしめてあげていた。

彼と一足違いで園子達がやってきた。

「なんで開けてるの？ 蘭！ 入るわよ」

園子が部屋に入ると歩美ちゃんが泣いているのをみて驚いた。

「なんでこの子泣いてるのよ！」

「ちよつと・・・ね」

と困ったように私は笑った。

「どないしたん？」

和葉ちゃんが歩美ちゃんに話しかけた。

「歩美が・・・蘭お姉さんのお願いを聞いてもらおうとしたら・・・おじいさんが怒って・・・」

泣きながら和葉ちゃんに説明している。

黙って服部君が私達の会話を聞いていた。

園子は歩美ちゃんを入り口まで送りに行った。

和葉ちゃんが心配そうに歩美ちゃんを窓から見送ったあと

「ところで蘭ちゃん。なんや工藤君に連絡してないんやて？」

「・・・」

私が黙っていると

「なんで！ なんでなん！ あんなに工藤君、蘭ちゃんが目を覚ますの待ってたんやで！」

「和葉！」

服部君が和葉ちゃんに

「ちょっと落ち着けや」

そう言つてまた黙つて壁にもたれかかった。

「うち・・・蘭ちゃんの意識が戻ったら、絶対工藤君と今度こそ幸せになると思うてた・・・」

「・・・ねえ、和葉ちゃん・・・今度つて本当に今度なの？」

私は和葉ちゃんに尋ねた。

「私、新一が学園祭で帰つて来た時・・・すごく嬉しかった。これで離れないで済むんだ。ずっと隣にいられるんだって・・・でも、あいつはいなくなった・・・」

「蘭ちゃん・・・」

私は近くの窓から外の景色をみつめた。

「そしてやつと新一が追つてた事件が解決したって言つて帰つて来た時も今度こそ本当に・・・なんて思つてた」

「・・・」

私は和葉ちゃん達が辛そうな顔をしているのに気がついた。

けれど・・・。

「だから、もうやめたいの。新一を思う事も追いかける事も・・・和葉ちゃん・・・ゴメンね」

私、上手く笑えてるかな。

その時

「いくで、和葉」

「いやや・・・」

和葉ちゃんが震えている。

「…嫌！嫌や！蘭ちゃん。うちそんな絶対嫌やあ！！」

泣き叫ぶような和葉ちゃんの声。

激しく慟哭する彼女の肩をそっと抱き寄せて

「お前が泣くなや」

「平次！蘭ちゃんが・・・」

「泣きたいのは、きっとねえちゃんのほうや・・・」

服部君は私に優しく笑いかけて

「また、明日くるさかい。今日はこれで帰らせてもらっわ」

「・・・うん」

私は2人を部屋から見送った。

5 / 6 話（前書き）

このページは読んで頂いても頂かなくても構いません。
次のページからでも話は続きます。

5 / 6 話

みんなが私を心配してくれて、
そしてみんなが泣いてしまう・・・。

私が意識を取り戻したあの朝。
園子がすべてを話してくれた。

新一が自分の為に旅立った事。
本当は私のそばにいたいと言ってくれていた事。
私に花を届けてくれていた事。

なにより私の笑顔をみたがっていたって事も・・・。

でも新一がアメリカに行ったあの日から、私・・・笑えないの。

前のように心から感情が出てこないの。

それに気がついたのは意識が戻ってしばらくたってからだった。

みんなは何も言わないけど、気づいている事はわかってた。

私はみんなが心配しないように頑張って笑うようにしていたけど。

新一・・・。

そばにいたかった。

それだけで私は幸せになれたのに。

もう、一人にしないでほしかった・・・。

新一を待つ事に疲れたっていうのは半分は本当だけど、

私の笑顔を誰より望んでいたからこそ、ゴメンね・・・。

会いたいけど会えない。

今、会えばきつと新一も悲しそうな顔をするでしょう？

もう、誰も苦しめたくないの・・・。

あの日、満月の夜に導かれるように屋上に行った。

私、フェンスを越えるつもりだったの。

その時だった。

彼が現れて私を抱きしめてくれた。

彼は私が泣きたいのを我慢している事が分かっていたみたいに・・・。

私は泣き顔を見られるのが怖かった。

誰かに見られたら、また誰かが悲しむ。

白いマントの中。

彼は囁いたの。

「私が貴女の今宵の砦となりましょう」と。

その言葉に私の中にあつた感情が少しずつ溢れ出したの。

あの時、気持ちがいさぐさ軽くなったよ。

本当にありがとう。

さっきのおじいさん、あなただったんでしょ？

怒っていたよね。

こんな私に・・・。

みんな、ごめんね・・・。

5 / 6 話（後書き）

蘭ちゃんの心境を書いて見ました・・・。

6話（前書き）

5話の続きで読んで下さい。

6話

気がついたら、オレはいつの間にか自分の家の前にいた。

「快斗ぼっちゃま？」

ジイちゃんが話しかけてきたが、オレは何も言わずに奥の部屋へと閉じこもった。

なんでオレ、あんな事言ってしまったんだろう。

なんでオレ……。

「快斗ぼっちゃま……お開け下さい」

ジイちゃんが心配そうな声で扉を叩く。

「オレ……今日初めて自信を無くしたよ……。いろいろ考えた
い……。予告状も暫くは出さないよ」

オレは扉越しにジイちゃんに言った。

「寺井には何があったかはよく分かりませんが……。快斗ぼっちゃまがそうしたいのならその様にいたしましょう……。」

ジイちゃんは優しくそう言った。

「いいのか？それで……。」

思わず尋ねてしまった。

「はい。快斗ぼっちゃまの人生です。悩むほど人は成長するといいます。今回もきつと無くてはならない事なのでしょう……。私は快斗ぼっちゃまの味方であり、よき理解者でありたいと思っています。ですから、しばらくはこのまま様子を見る事といたします」

扉の向こうでもジイちゃんが笑ってくれているのが分かる。

「わりーな……。オレも初めての事だから自分でもよく分からないんだ」

「そうでございますか」

オレは扉を開けることなく、なんだか安心した気分になった。

考えろ。

オレが何をしたいのか。

オレが彼女に出来る事はなんなのか……。

本当の笑顔を見るためには……。

考えるんだ。

園子は歩美を送った後に、車にお見舞いのケーキがあつたのを思い

出し取りに戻った。

「このケーキを食べたら、きつと蘭も喜ぶ事間違えなし！朝から並ばせたかいがあったわ」

蘭と一緒に美味しそうに食べているところを想像して思わず顔がほころんだ。

蘭のもとへと急いで歩き、エレベーターに乗ろうとした時だった。和葉が服部に肩を抱かれて、共に病院の正面玄関へと歩いていくのがみえた。

今来たばかりなのに、もう帰るのかしら？

まっ、ケーキ少ないから蘭と2人で山分けでもしちゃおうと！

そんな事を考えながら蘭の病室の扉を叩く。

「？」

中から返事が無い。

「蘭？入るわよ？」

園子がゆっくりと扉を開けた瞬間、思わず息を呑んだ。

「蘭が・・・床でうずくまる様に倒れているー」

「蘭！」

持っていたケーキの箱が床に落ちる。

慌てて駆け寄り、倒れている蘭を仰向けにして意識があるのを確かめる。

「蘭、しっかり！蘭！」

冷や汗を多量にかいて、呼吸も速い。

「園子・・・ごめんね。私・・・みんなを苦しめている」

「なに馬鹿な事言ってるのよ！しっかりしなさい！」

園子は急いでナースコールを押した。

「私・・・やっぱり・・・新一に会えない・・・だって・・・上手く笑えない・・・」

苦しそくに声を出そうとする蘭に

「もういいから！しゃべらなくていいから！早く！お願い誰か来てえ！」

その瞬間・・・急に蘭の力が抜けて重くなった。

「ら・・・ん？」

「園子、私達は親友よ」

蘭と笑いながら歩いた道が目の前に現れた。

その言葉を聞いたとき、私はとても嬉しかった。

今は・・・蘭にとって私はなんなんだろう。

虚ろな目の前で蘭が運ばれて行くのがみえた。

ランノソバニナクチャ・・・。

その思いだけで重い体を立たせて蘭の後を追った。

6 話（後書き）

あゝやばい……。私も倒れそう……。

7話

オレの元へ白い鳩が慌しく舞い戻ってきた。

彼女になにかあったのか？

よく分からないが彼女のもとへと向かわなければ。

胸の中がざわめく。

KIDに変装しハングライダーで彼女の病院まで飛び立つ。

「どうぞお気をつけて」

寺井は心配そうに見送った。

病院にたどり着いた時、病室には彼女の姿はどこにもなかった・・・。

静かな真つ暗な部屋。

月明かりだけを頼りに彼女の姿を探す。

やっぱり何かあったんだ・・・。

オレが廊下へ出ようとした時、誰かが部屋の中に入ってきた。
すばやくベランダへと隠れる。

そこに来たのは、あの時彼女を探しに来た園子という子だった。部屋の電気も点けずに、震えながら彼女のベットへと座る。

「蘭・・・」

頬を伝う涙が光っては、彼女の膝へと流れおちる。

「ゴメンね・・・蘭」

嫌な鼓動が全身に鳴り響く。

すぐに病院のありとあらゆる所を探した。

あとは、

「ICU・・・」

ここにいるのか。

オレが扉の前に行こうとした瞬間、

中から眠った彼女が酸素マスクと点滴を入れられた状態で出てきた。

「！」

まるで死人のように真っ青な彼女の顔。

「蘭！」

さつき部屋にいた園子が彼女のもとへと走ってきた。

「先生！なんで！蘭は・・・先生！！」

医者は園子にゆっくりと説明した。

「症状からみてショックの一つだと思います。・・・精神的にも体力的にも衰弱しきっています。」

ショックにもいろいろありますが・・・下手をすると命に関わる事もあります。しばらくは絶対安静にしましょう。いいですね？」
園子は先生の言葉を受け止めるように

「・・・はい」

そう短く返事して彼女のもとへとゆっくりと歩いていった。

命に関わる・・・。

その言葉に、オレはその場に立ち尽くし動けなかった。

工藤新一がそばに居れば、こんな事にはならなかったのか。

彼女のもとへ奴を呼べば、彼女は笑って元気になってくれるのだろうか・・・。

逆にショックを招く事だってあり得るだろう。

だからといって、ゆっくりとしている時間もないはず。
彼女はきつと日に日に弱っていくに違いない・・・。

とり合えず彼女の部屋へ向かおうとしたその時、
背後からあの時と同じ視線を感じた。

「お前・・・KIDやる？」

突然、後ろから声がした。

「なんであのねえちゃんの周りをチヨロチヨロとしとんねん」

静かだが威嚇しているようにも取れる声。

「なんの事かな？」

オレは平静に答えた。

「お前、何が目的や？工藤の事か？」

そいつはゆっくりとオレのほうへと歩み寄る。

「なら止めとくんやな・・・あのねえちゃんは何もしらんで
そいつの影が近くで止まった。

「それに工藤にはあのねえちゃんの事を頼まれとるんや・・・な
んかあったら容赦せえへんで」

「自分の愛する人を人に任せるとは・・・騎士失格ですね」

オレは一步下がる。

「・・・何が言いたいんや」

その瞬間火災報知器を鳴らした。

「なんや!？」

「何も知らない探偵君。君には彼女は救えない」
オレは続けてこう言った。

「天使は微笑を、本当に忘れたと思うかい？」

8話

ホテルの部屋に戻ると和葉が泣き疲れて眠っていた。
俺は起こさないようにそっと近くのソファへ座った。

「天使は微笑を、本当に忘れたと思うかい？」

大きなため息を吐き、天井を見上げる。

あの後、KIDは気配を消すと共にそこには姿はなかった。

「何も知らない探偵・・・か」

確かに俺、あんまりねえちゃんの事知らんかもな。

工藤の彼女。

毛利探偵事務所。

あの変なおっさんと2人暮らし・・・。

そう言えば復縁したって和葉が嬉しそうに前に話をしおったな。

プライベートな事は和葉経由で俺に回ってくるがあんまり興味も無かった。

そんな人の女の話なんか興味もわかんしな。

そやけど、今は話が別や・・・。

工藤に頼まれとった事もある。

それとは別に和葉が自分のことのように泣いてる。

あのねえちゃんを元に戻さな、こいつずっと苦しむ事になる。

和葉の頬に伝う涙を軽く指で拭った。

「それだけは勘弁してくれ・・・」

それにしても、

あいつ俺のこと「何も知らない探偵」って言いよったな。
という事はやで。

あいつ何か知つとるんやな。

俺はニヤリと笑った。

「捕まえて白状させたる」

「そんな簡単に捕まるようなKID様だともうなよ」

服部たちが泊まっているシティーホテルの近くの無人の廃屋ビルの
上。

双眼鏡を片手に、

「顔に出やすいタイプってところか？嘘がつかないのが良いところ・
・ってか」

ニヤケ顔で双眼鏡を下に下ろす。

「お前も舞台に上げてやるよ。感謝しろよ探偵君」
ハングライダーで夜空に羽ばたく。

オレは彼女の笑顔をどうしても見たいんだ。

例えそれが別れになるとしても。

きつと後悔はしないさ・・・。

8 話（後書き）

さて最後に向けて書き上げていこうと思います。

文章メチャクチャ、コロコロと語り手が違ったりして読みずらいと思いますが、もう少しお付き合い頂けたら幸いです。

9 話

目が覚めると園子が自分の手を握りながら眠っていた。

（園子・・・）

そつと自分の近くにあつた毛布をそつとかける。

「・・・蘭・・・ゴメンね」

蘭は一瞬起こしたのかと思ったが、園子はそのまま眠っていた。握られた手を見つめ

「私の方こそ・・・ゴメン」

もう一つの手を重ねる。

私・・・また苦しめてしまったんだね。

園子の握っていた手がピクリと動く。

「蘭・・・？」

私は園子の顔を見て

「・・・うん」

そつ一言いつて頷いた。

園子は涙を溜めて

「蘭・・・よかった」

そつ言つて急に下を向いてしまった。

「蘭・・・私・・・蘭の親友でいたい」

握った手が震えている。

「もつと私を頼つて欲しい。蘭の親友と胸をはつて言いたいのに！」
その言葉に私は握っていた手を離れた。

そして

「私達はずっと親友だよ、園子」

そつ言つて園子をそつと抱きしめた。園子は泣きながら何度も頷い

ている。

私も一緒に泣けたら・・・。

泣いてる園子を見ながら悲しくなった。

こんな時にも私は笑う事も泣く事も出さない。
私は感情を出す事が怖くなっていた。

そして蘭は涙が出ないその瞳を閉じた…。

それから数日後、平次と和葉が蘭のお見舞いに再度訪れた。

「あの・・・この前はゴメンな・・・うち、蘭ちゃんの言葉にビツクリしてもうて」

蘭は首を横に振り

「うっん。」

私の方こそ御免なさい。あんなに和葉ちゃんが応援してくれていたのに」

その様子をみて平次が

「俺、そこらへん散歩してくるわ」

そう言って部屋から出て行った。

それと入れ違いのように園子が入ってきた。

「あれ？今の和葉ちゃんとの色黒ボーイじゃ・・・」

園子は思わず振り返った。

平次も園子に気がついたみたいだが、チラッと園子をみてそのまま外へ出て行ってしまった。

「園子？どうしたの？今日は遅くに来るって言ってなかったけ？」

蘭が首をかしげる。

「ん〜そうだったんだけど……。心配だったからやっぱり来ちゃった」

エヘッと笑ってみせた。

「園子……」

蘭の瞳が少し曇った。

「大丈夫よ！たいした用事でもなかったし……。っと、それより早く来たのは」

園子が小包を蘭に手渡した。

「なに？これどうしたの？」

不思議そうに包みをみつめる。

「さっき届いたの。渡そうかどうかと迷ったけど。蘭に……。新一君から……」

一瞬心臓がトクンと音をたてた。

和葉が蘭の後ろに回り

「何してんの！蘭ちゃん、工藤君からやで！」

軽く蘭の背中を押した。

蘭は恐る恐る小包に手を伸ばす。

差出人に新一の名前があった。

思わず小包を落としてしまった。

「蘭！」

「蘭ちゃん！」

蘭はまた拾いなおそうとしたが、そのまま背を向けてしまった。

「なんでなん！」

蘭の背中が震えている。

「怖いよ・・・」

その包みに何が入っているのか・・・。

まるでそれはパンドラの箱のような気がしたのだ。

そんな蘭をみて園子が

「蘭が開けないなら・・・私が開けてもいい？」

蘭は何も返事をしない。

「和葉ちゃんはどう思う？」

今度は和葉に問いかけた。

「私は・・・蘭ちゃんが開けた方がいいと思うけど、そんなに怖がつてる蘭ちゃんに無理に開けるとはよう言わんわ」

怯える蘭をみて和葉が言った。

今にも途切れそうなか細い声で

「お願い・・・。園子、和葉ちゃん・・・開けてみて」

蘭は振り向くことなく下を向いてそう言った。

「ほんまにええんやね？」

蘭はコクリと頷いた。

きつと一人でみる勇氣も無い。

園子も和葉もいる今でしか見れないような気がしたのだ。
決心して目を堅く閉じて耳を澄ました。

「蘭、開けるよ」

9話（後書き）

という展開。うーん、なんだかなあ…。

10話

蘭へ。

園子から連絡がないって事はまだ夢の中なんだろう？
だから園子にこれを託すよ。

実はこの前、こっちで連続宝石強盗殺人事件があつてさ。

結構、有名なブランド店が狙われていて俺の所にも警察が力を貸して欲しいって言うてきたんだ。

俺にしてみればそんなに難しい事件じゃなかったけど、その警察官の一人が父さんの友達で断れなくてさ引き受ける事にしたんだ。

まあ、犯人は無事に捕まえる事が出来たけど、その店の下見に行った時ちよつと気にいった物があつたんだ。

蘭、聞してる？

お店の人に売り物じゃないからって言われたけど、

「犯人を捕まえてくれたら売ってやるよ」
って言うてくれてさ。

「恋人に贈るのかい？」

って聞かれたから

「他に送る相手なんていないさ」
って答えたんだ。

蘭、これをいつも身につけていて。
俺は必ず会いに行くから……。

それまで俺の代わりにこいつを送るよ。

また、連絡する。

工藤新一

「相変わらず気障ね・・・」

「ええわぁ！工藤君らしくて素敵やわ！」

2人で盛り上げてしていると

「そっか・・・あいつ元気なんだ。よかった・・・」

蘭は背を向けたままベランダへと歩いていき、外へ出た瞬間に力が抜けたように座り込んだ。

「蘭！」

かけようとしたが足を止めた。

「よかった……。本当に」

顔は見えないけど泣いている。

「蘭……」

蘭が泣いている。

私達の目の前で……。

その姿にホッとして2人で顔を見合わせた。

「ところでなんやらな？そのプレゼントって……」

小さな箱に入っている。

しかしそれは受け取り人以外、開けるわけにはいかない物だった。

「蘭ちゃん、これ……」

和葉は蘭に箱を手渡した。

箱を開けるとそこには物ではなく、1枚のメッセージカードがあった。

「この宝石を身に付ける者へ告ぐ

雲がごとく鳥のように風と共にいきよ。

あるべき場所で羽根を癒すがいい。

その果てでこの宝石を片手に我は待つ。

貴女の騎士

怪盗KID」

「「KID!!!」」

思わず覗き込んでいた2人は大声で叫んだ。

蘭はそのメッセージを両手に持ち少し震えていた。

2人の声に驚いて平次が戻ってきた。

「なんや・・・!どないしたんや!」

蘭が握っているメッセージを和葉が指した。

平次は

「ちよつと見せてくれ」

蘭からそのカードを取り上げる。

それを読んで平次は一瞬フツと笑った。

「それしか方法はないんか」

蘭にカードを返して、遠くを見るように空を見上げた。

「平次?」

怪訝な顔で覗き込む和葉に対して

「まあ、そうやな・・・ねえちゃん次第や」

そう言つて蘭の方へゆっくり目線を向ける。

「・・・私次第?」

平次は蘭の前に座り優しく話しかけた。

「そうや。・・・念のために聞くんやけど、ねえちゃんは今工藤が嫌いになった訳ちゃうよな?」

突然の言葉に蘭は思わず涙が出そうになり手を口にあてた。

「もう、工藤を待つのは辛いちゃう事はようわかった。そやけどな・・・」

蘭の頭に手を軽くポンとおいて

「はつきり言うけど、俺と一緒に工藤も諦めが悪いさかい、ねえちゃん拒否してもあいつは会いに来るで」

ビクッと蘭が震えた。

「なあ・・・いつそうアイツに・・・工藤に会いにいかへんか？」

その問いに蘭は激しく首を横に振った。

「大丈夫や。ねえちゃん一人で会いに行かせたりはせえへん。俺も一緒についていったるから」

その言葉に思わず

「平次だけずるいわ！うちかて蘭ちゃんと一緒に工藤君に会いに行きたい！」

その後を追うように

「じゃあさ・・・みんなで会いに行かない？私も蘭のそばにいたいし。そうと決まれば飛行機の予約してくるから！」

嬉しそうに園子は部屋を出て行った。

「待つて園子！待つ・・・」

止めようとする蘭に平次が

「大丈夫や。俺らがついてる」

いままでになく優しい笑顔で蘭を見ている。

「そやで、蘭ちゃん一人には絶対させへん。うちらはみんな蘭ちゃんの味方や！」

涙目の和葉が蘭の手を握りながら、太陽のように笑っている。

「服部君・・・和葉ちゃん・・・」

私、なんて言ったらいいかわからないけど、

ありがとう・・・。

涙が止まらないよ……。

どうしよう……。

もう、止まらないよ……。

「我慢していた分、泣いてええんよ？ いっぱい泣いてええから……

」
和葉が蘭を優しく抱きしめた。

「私……でも……笑えない……新一に会っても
その言葉に平次が

「笑えないならそれでええんや。工藤が少しでも思い詰めよったら、
その顔に俺がごっつい1発をお見舞いしたるわ」

「平次はホンマに野蠻やなあ。工藤君にそんなことしたらうちが平
次を10発どついたるから、蘭ちゃんは安心しててええよ」

「なんで10倍になつとんねん！」

「「！」「」

蘭が笑っている。

泣きながら笑っている。

昔見たあの時と同じ笑顔で・・・。

「うち・・・園子ちゃん呼んでくる」

急いで園子のところに行こうとした時、平次が和葉の手を引つ張り

「俺が行くから。和葉はねえちゃんのそばにおってやり」

蘭の前にストンと座らせた。

「すぐに戻るさかい。2人ともゆっくりそこに居とき」

平次が部屋を出て行った。

残された2人は思わず目が合ってクスクスと笑いあった。

「改めて・・・お帰り、蘭ちゃん！」

10話（後書き）

本当にお帰りなさい蘭ちゃん！

蘭「ただいま！これって最終回なの？」

m i c k y「それでもいいか！」

あれ？・・・みんなの冷たい視線がイ・・・イタイですよ・・・。

m i c k y「んじゃ・・・もうちよつと頑張ります・・・。」

蘭「うん！」

m i c k y「・・・。」

11話

平次は屋上へと駆け上がった。

そこには園子が高い空を見上げてポツンと立っていた。

息が上がった平次に気がついて園子が振り向く。

「どうしたの？」

「どうしたもこうしたも・・・」

平次はなんとか息を整えようとする。

「ちよつと・・・何！何かあったの！？」

園子が平次に慌てて駆け寄る。

心配そうに近づく園子の手首をしっかりと掴む。

「えっ！」

「お前、あれはホンマに工藤からの贈り物なんか？」
睨むように園子をみつめる。

「本物よ！なんでそんな事言つのよ？」

園子は怒ったように掴まれた手首を振り払った。

「なんで・・・って、俺にそんな簡単な答えを言わすんか」
「？」

「あんなラブレターみたいなメッセージを送りよって・・・」
「何の事！？一体なんなの！」

平次が一步前へと進む。

「ええ加減に芝居やめえや・・・怪盗KIDさんよ」
「！」

平次の言葉に園子が驚いて目を見開いた。

「・・・さつきすれ違った時お前の俺を見る目が気になったんや・・・。なんや俺に隠し事でもあるかのようにワザとみとったやろう・・・それに一瞬、お前の独特のあの感じがしたんや」
その感じを思い出すように目を軽く閉じた。

「やだあ、そんな事気にしすぎよ！」

「そんで、なんや気になって扉の向こうで中の様子を伺ったんや」

「・・・」

園子は黙って聞いている。

「そしたら工藤から荷物が届いてるとか抜かしよるし・・・」

「本当にあれは」

その言葉に平次が目を開き真っ直ぐに園子をみた。

「本物やろうな・・・。工藤の字をねえちゃんが見間違えるわけが無い」

「だから！」

「いつ・・・メッセージが入れられたんやろうなあ。最初から入っていたと考えたほうが当たり前やと思うのは・・・俺だけやるか」
平次はニヤッと笑った。

園子もフツと笑って両手を挙げた。

「まあ・・・解ってもらえないと困るしね・・・」

園子の変装をとり、キッドが姿を現した。

「・・・あんな簡単なメッセージ、そこら辺のガキでもわかるちゅーねん」

平次はその場に立ち止まり、キッドに吐き捨てるように言った。

「ガキでもわかるように・・・作ったから何も問題はないだろう？」

口元は笑ったまま平次を見据える。

「・・・俺がガキっていいたいんか？」

平次は少し低い声で言った。

屋上の2人の間に風が吹き抜ける。

「いいや・・・感謝してるよ探偵君。だから1つだけプレゼントをやるよ。よく聞けよ。あれは本当に工藤新一から彼女へのプレゼントだ。しかし、それをただ渡しても彼女は心の闇に飲み込まれるだけだった。・・・時期を待っていたんだよ」

キッドはフェンスに沿ってゆっくりと歩き出した。

「何のためにや」

キッドを目で追いながら言った。

「彼女の心の開放・・・。その為には導いてくれる奴が必要だった」
キッドは淡々と話しながらも、瞳は切なそうにフェンスの外側をみていた。

「オレはお前を信用してへん。・・・そやけど、さつきねえちゃん
の笑った顔を見た時にお前の言葉を思い出したわ。確かに俺はねえ
ちゃんの事を何も知らんし、まさかあそこまで追い詰められるとは
正直思ってたのが本音や」

キッドはこっちを見ずに平次の言葉を聞いている。

「あんな状態になるまで追い詰めた俺達にも責任はある。

そやから、あんまりいい気はせえへんかったけど、あのメッセージとおりに動いてやったんや」

キッドは歩いていた足をピタッと止めた。

「ここは、最初に彼女の涙を受け止めた場所」

キッドはポツリと言った。

「なんや？」

訝しげにキッドの言葉に聞き返す。

「……もう時間のようだ。最後に一つ言っておくがオレは人は奪わない」

フワリとフェンスの上に立つ。

「待て！おい！」

慌てて平次が駆けつける。

「フツ……また会おうぜ探偵君。お前がそこへ辿りつけたらの話だがな……」

屋上から飛び降りた。

「キッドー！」

急いでフェンスに向かったが、ハングライダーはもう手の届かない場所を飛んでいた。

……人は奪えへんって、そんな悲しそうな声でいうなや……。

平次はフェンスに背を向け、病室へと戻って行った。

12話

目が覚めると私は雲の中にいた。

窓を覗くと星の輝きと月明かりが雲の合間をぬって顔を出している。

私・・・新一に会いにいくんだ・・・。

胸の中で何かがトクンと音を立てた。

昨日の夜に私達は出発した。

このチケットはお父さん達が買ってくれたものだった。

「気をつけて行ってくるのよ」

お母さんは心配そうに空港で何度も私に言った。

「あなたも・・・何か言っておいてちょうだい」

お父さんはずっと黙っていたが、

「・・・蘭・・・・・・・・いや・・・・いい。お前が幸せならそれでいいんだ」

そう言って私の頭をクシャと撫ぜた。

「探偵ボウズに宜しく言っといてくれ」

「わかった。言っとくね」

暫く私の顔をジッとみてお父さんは行ってしまった。

そんなお父さんをみてお母さんが小さなため息をついた。

「仕方のない人ね・・・」

有希子が明日NYの空港で待つてるはずだから・・・それと何かあったらいつでも連絡を頂戴。いつでもいいから・・・」

お母さんは私の肩を優しく抱きしめた後、その肩をクルッと後ろに向け

「さあ、行ってらっしゃい。私はここで見送るわ」

「お母さん？」

背中をポンと押してみんなの所に押しやった。

園子が時計をみて

「そろそろフライトの時間ね。忘れ物ない？」

各自荷物を持ってそれぞれ歩き出した。

園子と和葉ちゃんが私の両腕を組んできた。

「蘭、行こう」

「蘭ちゃん」

「うん。じゃあ・・・行つてきます」

お母さんが手を振って見送ってくれている。

そうして私達は飛行機へと乗り込んだ。

私の隣の席に園子が。

私の前には服部君と和葉ちゃん。

和葉ちゃん達は1度大阪に帰って親を説得して、また東京へ戻ってきた。

「語学勉強兼ねて」を強く言い張り続けて、心配する親を無理やり抑えてきたみたい。

うちのお父さんが服部君と和葉ちゃんの親を説得してくれた事も後で聞いた。

お父さん・・・ありがとう。。

空には濃い群青が優しく薄青い澄んだ色が広がるうとしていた。
私は目を離さないように色が変わるその時を待った。

青き空に朱色がまざる。

その光が私の心を満たしていった。

未来への不安が希望へと変わった瞬間だった。

夜明け・・・。

ねえ、新一。

私はいつも守られてばかりで、待つことしか出来なくて不安だった。

でも私はこうして光の中でまた歩く事が出来た。

大事な人たちがそばにいてくれるし。

待っててね・・・もうすぐ会いに行くから。

園子が目を覚ました。

「うわぁ！眩しい・・・あれ？蘭、起きてたの？」

すると前の2人もその声で起きてしまったみたい。

「うっさいなあ・・・。なんやねえちゃん起きたんか」

服部君はウーンと背伸びをした。

「えっ！蘭ちゃん起きたん？ホンマや。蘭ちゃん気分悪くない？」

心配そうに和葉ちゃんが私の方を見た。

「大丈夫だよ。なんだか空が綺麗だったから・・・」

そう言うところの人が外を覗く。

「ホンマやな・・・」

「綺麗やね・・・」

「ああゝこんな綺麗な朝日を新一と一緒にみたゝって思ってるでしょう・・・もう少しの辛抱だから我慢しなさい。それよりお腹空かない？すいませーん！」

園子は近くのCAを呼んだ。

「やだ・・・もう・・・ちよつと園子！声が大きいよ」

周りを見渡すとさっきまで眠ってた人たちが起きはじめている・・・。

「なんでよ？腹が減っては戦は出来ぬよ！」

「園子ちゃん朝から元気やなあゝ。なんかうちまでなんか食べたくなってきたわあ。平次も何か飲み物でも飲む？あつ、こつちもお願いします！」

「和葉ちゃんまで・・・じゃ・・・私も何かもらおうかな？」

キヤーキヤーと飛行機内には楽しそうな私達の声が響いていた。服部君は黙って毛布を被ってしまった。

（あゝうるさい！・・・頼むからはよ着いてくれ）

新一・・・待っててね。
もうすぐだよ。

12話（後書き）

次回は夜明けの続編となります。

蘭「あれ？これ続編じゃないの？」

m i c k y「まあ・・・いわゆるサイドストーリー的な・・・」

蘭「そうなんだ。ところで私、新一に会えるの？」

m i c k y「楽しみだね！」

蘭「／／／」

13話「夜明け」(前書き)

ここからは「夜明け」後でも読めるように設定してみました。新メインで進んでいきますので宜しくお願いします。

13話　夜明け

「新ちゃん。朝よ起きなさい」

昨日は遅くまで調べ物してて、寝てないんだよ…。

「新ちゃん!」

「……」

俺は母さんの声を無視してもう一眠りを決め込んだ。

今何時だろう？

そんな事どうでもいいか。

もう一度、蘭との夢を見るんだ。

だから、おやすみ・・・。

眠りにつこうとしたその時、
母さんとは違う、もう一つの声。

「ホント…新一って寝起きが悪いんだから…」

嘘だろ…。

夢なのか。

いつも覚めては消える幸せで悲しい夢。

「いい加減起きないと夕方になっちゃうよ?」

この声…。。

「新一?どうしたの?寝ぼけてるの?」

俺はベットから降りてゆっくりと声の主の方へと行く。

「本当に…蘭なのか…」

俺はおそろおそろ蘭に手を伸ばす。

その手を彼女は握り締めて…微笑んだ。

「うん。…やっと会えたんだよ……新一」

夢なら覚めないで。

そう願いながら蘭を抱きしめた。
強く…強く。

俺の腕の中で蘭が泣いている。

「蘭…顔をよくみせて」

蘭は頷いてそつと顔をあげた。

涙を溜めて、一生懸命に笑う蘭の顔。

「泣くなよ…蘭」

涙が出そうなのを我慢して下を向いてしまった俺。
絶対に笑顔で会いたいと思っていたのに。

「新一…本当に新一なんだよね」

「ああ…」

いつも夢から覚めた後にくる空しさは辛かった。

何度も日本へ行こうと思ったんだ。

でも、俺にはできなかった。

中途半端な俺を君に会わせたくなかった。

情けない姿はみせたくなかったんだ。

「蘭」

もう一度抱きしめようとしたその時…。

「……コホン……新ちゃんも蘭ちゃんもちよつといいかしら？」
軽く咳払いをして、母さんが俺達に下に来るように行った。

俺達は急に照れてしまいパツと離れた。

クスクスッと笑う蘭をみて、思わず軽く頬にキスをした。

「びっくりさせないでよ！」

「隙をみせた蘭が悪いんだ」

俺は蘭より先に1階へと駆け降りた。

俺の顔はきつと真っ赤だ・・・多分な。

そして階段を降りるとそこには服部と和葉ちゃん、園子がお茶を飲んでいた。

「なに！？このお茶すごくおいしいですね！」

「ほんまや！うち、こんな初めて飲んだわ！」

母さんは嬉しそうに

「そうでしょう？このお茶は特別な時にしか飲まないようにしてるのよ」

なんだか・・・騒がしいな。

「おつ！工藤！久しぶりやんけ。元気にやつとたか！」

ゲツ・・・服部までいるし。

「なんでオメーまでいんだよ」

俺が少しウンザリ気味に言う

「あんなー。オレがどれだけ大変な思いして、ここまでねえちゃんを連れてきてやったと思っとなるんや？」

俺は気がついた。

確かに蘭一人ならともかく、この3人を連れての道のりは・・・大変だったな服部。

「・・・ご苦労さん」

「おお・・・」

そう言うとな服部は

「オレ少し休ませてもらうわ」

大きな欠伸と共に近くのソファーへと倒れこんだ。

俺は和葉ちゃん達の所へ行き

「いろいろと・・・ありがとう」

とお礼を言いに行った。

「お礼にはまだ早いわよ」

園子は楽しそうだ。

嫌な予感がする・・・。

「新ちゃん。お母さん達ちよつと買い物に行くからお留守番お願いね」

4人で買い物に行くらしい。

和葉ちゃんが

「平次、1度寝るとなかなか起きへんし・・・工藤君、頼んでええかな？」

と拝むように俺に頼んできた。

「いいけど・・・蘭も行くのか」

「えっと・・・」

俺の隣で蘭が困った顔をしていると他の3人が一斉に

「蘭は私達とこっちに向かうときから買い物約束してたんだから！」

「蘭ちゃんと行くのめっちゃ楽しみにしてたんやで！」

「蘭ちゃんは新ちゃんだけのものじゃないのよ！」

つて、オイオイ・・・。

俺は悪者かよ・・・。

「わかったよ。服部と留守番してるよ」

大きなため息を吐きチラッと蘭の方をみたが、皆に押されるように玄関を出て行ってしまった。

ヤレヤレだな・・・。

俺は母さんが入れてくれたお茶を口にして新聞を読み始めた。
俺の記事の隣に、「1412」の数字。

あいつ・・・こっちに来ているのか・・・。

そういえば最近、あいつの記事を見なかったな・・・。

何気なくソファーに目をやると服部が爆睡している。
その横に蘭の荷物があつた。

本当に会えたんだな・・・。

改めて抱きしめた蘭のぬくもりを思い出した。
でも、また蘭は日本へと帰ってしまうだろう。

また、辛い日々が始まるんだな・・・。

俺はまだ暫くは帰ってこないだろう。蘭の事を想いながら幸せな眠り
についた。

13話 夜明け (後書き)

いかがでしたでしょうか・・・。

蘭「やっと会わしてくれたね」

新一「もったいつけやがって」

m i c k y「・・・障害は多いほうがもりあがるでしょうね新一君

(ニヤツ)」

新一「・・・スイマセン」

14話

「おい、工藤。起きんかい」

誰かが俺を揺さぶっている。

チラッとみると服部が俺に何か言っている。

「なんだ・・・服部か・・・」

そしてまた寝ようとした瞬間

ゴンッ！

「イッテー！何すんだよ！」

俺は頭を殴られビックリして起き上がった。

「行くで」

服部は帽子を被って外へ行こうとした。

「何処へだよ・・・」

俺はちよつと不機嫌気味に聞いた。

「お前のねえちゃんの所や」

「はあ？」

確か蘭たちは買い物に行くとか言ってたよなあ。

まさか・・・。

蘭の身に何かが・・・。

あの日の事を思い出し、嫌な汗が体中に纏わりついた。

「なんか、買い物し過ぎたから迎えに来てって、お前の母ちゃんから電話がさっきあったんや」

「・・・・・・・・・・」

そういう事が・・・。

母さんはいつもそう言って荷物持ちをさせるんだ。

大抵、断ってるけど今回は蘭もいるし仕方がないか・・・。

「場所は？」

「タクシーの運ちゃんに言っただけから、それに乗って来いってさ」

窓の外にはタクシーが止まっていた。

怪しい・・・。怪しすぎる・・・。

「俺・・・そういえば調べ物が・・・」

2階に行こうとしたとき服部が俺の腕を掴み

「まあまあ、アメリカ見物と行こうやないか！せっかく来た客人をお前はもてなさん気なんか？」

服部は嬉しそうに満面の笑みでそう言った。

この顔・・・。

園子の何か企んでいる顔とそっくりだな・・・。

「なんや？文句でもあんのか」

「・・・ねーけどよ。つまんねー事に巻き込むなら直ぐに帰るからな」

俺はシャツを整えて玄関へと出て行った。

タクシーに乗り込み暫く走ると郊外へと出た。

どこまで行くんだろう・・・。聞いても絶対言わないだろうな。運転手も母さんにキツク言われてるだろうし。

小さくため息を吐いたその時

「あんな・・・工藤。お前ねえちゃんに小包かなんか・・・贈ったやろ」

服部が外を眺めながら聞いてきた。

「ああ。あれの事か・・・ってなんでデメー知ってるんだよ！」
思わず詰め寄ると

「たまたま・・・や。たまたまその場にいたんや」
「？」

そういえば蘭がアレを身に付けてなかった。

蘭の事だから肌身離さずもっているものと思っていたのに・・・。

「何か・・・あったのか？」

すると服部が慌てて

「ちゃうちやう。そうやのうて・・・なんやキツイ手紙入ったやろ？ねえちゃんが照れて隠しよってな。それから俺らにみせてくれへんのや。なあ、あの中身・・・」

服部が何か聞こうとした瞬間車が停まった。

「お客さん、ここですよ」

そこは真っ直ぐな一本道に桜の木が所々植えられている丘だった。丘の頂上にポツンと教会らしい建物がついている。

「桜・・・これはまた、綺麗ななあ・・・」

空は雲一つない夜空となり、月明かりだけで十分歩けた。少し白い桜の花びらが風に乗りユラユラと舞っていた。

俺と服部はゆっくりと丘の上を目指した。

教会の前には母さんが腕時計を見ながら立っていた。俺に気がつくと、

「新ちゃん！こっちこっち」

なんだか、すごく張り切ってないか？

母さんに腕を引っ張られ、俺は控え室へと入れられた。そして白のタキシードに素早く着替えさせられた。

「もしかして母さん・・・」

「逃げないわよね。新ちゃん」

「俺、帰るよ」

すると扉を叩く音がして振り向くと服部が黒のスーツに着替えて立っていた。

「お前・・・はよせーや。和葉達がうるさくてかなわんわ」
すると母さんは

「少しだけだから・・・ね」

俺はため息をついてこう言った。

「別に結婚式が嫌な訳じゃねえよ。蘭とは・・・って思ってるし。それに蘭を幸せにしてやりたいから、みんなが揃って・・・蘭の両

親もきちんと招いてやりたいんだ」

俺は母さんに言った。

「あら、でも蘭ちゃんのご両親がお願いしますって言うてらしたのよ」

「えっ？」

「蘭ちゃんが幸せになるならそれでいいって」

「蘭は・・・その事を蘭は知ってるのか？」

「さっきその話をしたら少し黙っていたけど、

「空港で見送りに来ていた両親をみた時に・・・そんな気がしていたんです」

つて・・・」

蘭！

思わず俺は部屋を飛び出し蘭の元へと駆け出した。

「蘭！」

するとそこには白いウェディングドレスを身に纏った蘭が椅子に座って鏡を見ていた。

「新・・・」

振り向かない蘭に近づいて後ろからそっと抱きしめた。

「いいのか・・・それで？」

蘭は首を縦に振った。

「俺は絶対蘭を幸せにすると決めたんだ。後悔はさせたくない・・・」

「うん」

蘭が振り返り俺の手を握った。

「お父さん達の想いも、ちゃんと貰ったの。だから大丈夫・・・これからはどうぞよろしくお願いします」

そう言って蘭は頭を下げた。

「・・・こんな俺だけ的一生かけて蘭を守るから・・・幸せにするから・・・だから」

俺の願いは・・・

俺の言いたかった言葉は・・・

「ずっとそばにいて・・・ください」

俺は今でも神様は信じてない。

蘭が事故にあつたあの日。

俺は神や仏なんてくそくらえだと思っていた。

でも、こうして暖かい蘭の手を握っていると少しだけ信じたい気分になった。

蘭をみつめると俺に微笑んでくれる。

「行こうか・・・蘭」

「うん。新一」

俺達は微笑み合って手を繋ぎながら、皆が待つ扉の向こうへと歩き出した。

14話（後書き）

次回で最終話となります。

今、やっとそれを書き終えました。

ホッとする最後になったと思います。

明日に投稿しますので宜しく願います。

15話（前書き）

さて！最終話となりました。

私のヘンテコな文章を、我慢して読んで頂きありがとうございます。

最後のテーマは…未来へです。

ではどうぞ！

15話

式場は色とりどりのステンドグラスで覆われた美しい場所だった。

十字架の前には神父が聖書を片手に俺達の前に立っていた。

神の前で誓い合う。

問われる答えに返事をする度に蘭が涙ぐむ。

式は着々と進行していった。

母さんや和葉ちゃん、園子は感激して式の間ずっと泣いていた。

そんな中で服部は一人で何かを考えていた。

神父が指輪の交換を告げた時、いきなり服部が立ち上がった。

「どうした、服部？」

俺は不信に感じて、思わず聞いてしまった。

「いや…すまん。何でもない」

そう言うつとまた座った。

「平次？」

和葉ちゃんが心配顔で服部を見ている。

「…」

俺は服部のその行動に何かあると感じた。

「静粛に！」

神父の言葉に式の空気が元に戻された。

目の前の蘭もなんだか不安そうな顔をしている。

だめだ。

今は式に集中しよう。

無事に指輪の交換も済み、後は・・・キス。

ヴェールを上げて蘭の顔がはっきりとみえる。

そっと口づけを交わす。

何秒たったんだ？

そんな事どうだっていいか・・・。

蘭を腕の中に抱きしめる。

俺達はこの間にピッタリと合う事が出来る。

どっちが欠ける事もダメなんだ・・・。

「ええ加減にせえや・・・。全く見てられんで」

「蘭ちゃん・・・ホンマに良かった・・・ウウ・・・」

服部が泣き止まない和葉ちゃんの頭をポンポンと叩く。

「蘭・・・幸せになるんだよ。私もいつか蘭以上に幸せになるんだから。負けないんだから・・・ヒック」

ハンカチを握り締め、この式一番に泣いている園子は感無量のように。

「優作にも見せたかったな・・・。本当に素晴らしい式だわ」

どうしても仕事の都合上来れなかったが、この式の詳細は脚色されて後日にでも伝えられるだろう。

式もなんとか無事に終わった。

俺と蘭は先にタクシーに乗って家へと向かった。

後片付けとかあるらしくて、先に帰らせられたといった感じだ。

家のすぐ近くでパトカーの数台とすれ違った。

なにか事件なのか？

「新一・・・行きたいんじゃない？」

ドキッ。

「そんな事無いよ・・・アハハ・・・ハ・・・」

蘭が俺の顔をジッとみている。

ヤバイ・・・。

すると蘭は小さく溜息をつき、

「私なら・・・もう大丈夫だから」

そう言つと指輪を見せてニコツと微笑んだ。

そんな蘭の頬に軽くキスをして

「家で待つて。直ぐ戻るよ。これ家の鍵・・・これは蘭がずっと持つていいから」

そう言つて俺はタクシーを降りた。

「お客さん、幸せなのに泣いているの？」

運転手が話しかけてきた。

「とても・・・幸せです。信じられないくらい・・・」

「幸せでも泣いたり、悲しくて泣いたり・・・女性は大変ですね」
家の前でタクシーがエンジンを止めた。

「でも、今は幸せなんですよ」

蘭が小さく頷く。

「だったら笑つて下さい。貴女には笑顔が似合いますよ」

「ありがとうございます」

そう言つてタクシーを降りようとした時、小さな箱を取り出し彼女に渡した。

「これ・・・？」

運転手はキャップを深く被り、

「もう、大丈夫みたいですね・・・ジュリエット」

「？」

「最初から・・・分かっていた事です」

蘭はハツとした。

「私！あなたにお礼を言いたかったの」

車のエンジンがかかる。

「待って！」

運転手側の窓を叩く

。

顔を下に向けたまま、こっちを見ようとしない。

蘭はすぐる様に窓に手の平を当てる。

チラツと運転手は窓の外に目をやると、あの時の白く美しい手がそこにはあった。

躊躇いながら自分の手の平を重ねる。

「・・・貴女の笑顔がどうしても見たかった・・・これでお別れです。私は私に戻らなくては・・・」

重ねた手をそつと離れた。

そして車が走り出す。

「ありがとう・・・」

声は届かなくてもきつと・・・。

キッド・・・。

私の失くした心の一部だった人。

あなたがあの夜いなければ、私の現^{いま}在はなかった。

だからあなたは「お別れ」と言ったけど、いつか出会っような気がする。

渡された箱の中身はあの日新一から送られた物。

「天使のペンダント・・・」

私は自分の首に掛けて見た。

私は天使でもなんでもないけど、そうでありたいと思う。

みんなの為にも私は幸せでなければならぬ。

そう、彼の為にも。

家の前に座り、新一の帰りをいろんな事を考えながら待っていた。
すると遠くから走って新一がやって来た。

「蘭！家にいろって言っただろう。何やってるんだよ」
少し怒りながら私の元へと駆けて来てくれる。

「新一！」

私は新一の腕の中に自分から飛び込んで行った。

「ウワァー!?」

「キャァー!?」

時は流れて行く。

人には決まった時間があって、

その中で幸せを見つける事は難しいけど、

私は皆のおかげで見つける事が出来た。

みんな？

それはまた別の幸せのストーリーだから。

その時にでもまた・・・。

「お父さん・・・お母さんが笑って眠ってるよ」

「もう少しこのままでもいいささせてあげような」

「うん！じゃあ、あのお本読んで！」

「ホームズはまだ難しいんじゃないか？」

「いいの！だって面白いんだもん！」

「これは私達の幸せのストーリー」。

完

15話（後書き）

はい。

終わっちゃいましたね。やっぱり終わると寂しくなるものですね。
。。。（＜―＞）。。。

次は何を書こうか。

私に書ける物があるだろうか…。

また、テーマが決まりましたら投稿したいと思います！
長々とありがとうございました♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2060b/>

朱光のかけら

2010年10月20日19時26分発行